

逸脱する図書館

公開シンポジウム記録

司会：そろそろお時間ですので、はじめたいと思います。少なくともよかったと思っています。一応、公開講演会として大学でやっていますので、広報はしているんですけども、今日は基本的にお話をいただくと同時に、そのあとどれだけ自由に意見交換できるのかということも大切にしたいということで、人数を絞りたいと考えていました。お集まりいただいて、ありがとうございます。司書課程主任の中村百合子と申します。本日は多摩美術大学教授の港千尋先生と、それから本学の文学部教授の河野哲也先生にお出ましました。「逸脱する図書館」というタイトルがついているんですが、このタイトルがいかげんなのかという説もありますけれど、そのぐらい、要するに言いたいことは自由だということで、先生方と自由に意見交換をさせていただく機会を設定いたしました。

港千尋先生については、図書館関係者は多摩美術大学の図書館の建設に、建築家の伊東豊雄先生とともに関わられたとかですね、そのご経験から書かれた『つくる図書館をつくる』という本で知らない人は図書館界にはいないかなというふうに思っています。またご著作を拝見していますと、活字・本・図書館の表象するものについて、その実体と人間の身体の関係について多くを語っておられまして、わたくしも先生のご著書の愛読者の一人です。そこに、今年になって平凡社新書で出版された『芸術回帰論』を拝読して、これは一度お話をうかがわねばと強く思うにいたりしました。というのは、3.11のあとに、教育とか社会を考えるにあたって、芸術が果たす重要な役割について、わたくしは本と図書館の関係から考えたいと思ってもがいているところなのです。これはわたくしの個人的な事情ですけれども、わたくしとまったく同じ経緯ではないにしても、図書館界で港先生の話の直接うかがってみたいと思っていた人は、少なくないと思いますので、今日このような機会を設けることができ、本当に嬉しく思っています。今回、僭越ながらわたくしが設定いたしました「読書と創造のあいだ」というタイトルで30分ほどお話していただきます。

今日はとっても豪華でありましてですね、本学の文学部教育学科の河野哲也教授にもお話しいただきます。図書館関係者には慶應義塾出版会から出しておられる『レポート・論文の書き方入門』という河野先生のご著書を知らない方はいないと思うんですけども、先生の本当のご専門は哲学・倫理学でいらっしゃるしまして、心・身体・環境にかかわる哲学の専門書、入門書、さらに科学技術にかかわる倫理、道徳教育、哲学実践についてもたくさんのご著作を発表しておられます。今日は先生とのご相談の上、「思索と対話を越えて」というタイトルでお話をいただきます。

ではまず、先生方から30分ずつお話しいただきまして、そのあと15分の休憩をはさんで、お話よりも長くなりますが1時間半ほどフロアとの対話の時間をとらせていただきたいと思います。人数も少なめでいい状況になっていると思いますし、みなさんのほうもご自由にお話ししていただきたいので、ご質問の紙も一応用意してございますから、こちらの紙にですね、休憩の時間までにご質問を書いていただいて、前にお出しいただければと思います。それで休憩の後は、私を含めて前の方で先生方と一緒にこの質問の用紙を拝見しまして、前半はこの紙の方に書いていただいたものの中から先生方にお選びいただいたものに答えていただいたり、それへのお答えをひきながら対話をしたいというふうに思います。そのあとに紙には書かなかったけれども考えたことがあるというようなことが起きると思いますの

で、挙手をいただいでご質問をしていただく時間を取りたいと思いますので、どうぞ有意義な対話の時間となりますよう、ご協力をお願いいたします。それでは港先生、よろしく願いいたします。

港千尋氏 「読書と創造のあいだ」

港先生：ご紹介ありがとうございます。みなさん、こんにちは。港です。河野先生、今日はよろしく願いいたします。

今、ご紹介いただきましたように、ここ3、4年でしょうか、多摩美術大学で新図書館ができたこともあって、図書館についての文章や、書物や活字についての文章を書くことが比較的多かったと思います。今日はわたくしの方から読書と創造について少しお話して、そのあと先生はギブソンをはじめとして知覚の生態学のご専門でもいらっしゃいますから、図書館学よりはもう少し広く空間やイメージやそういうお話になっていくと思いますけれども、そのヒントになるようなお話がいくつかできればいいかなと思います。

東京ブックフェアというのが毎年、開かれています、今年もビッグサイトで大きな催しがありました。やはり電子書籍・電子出版というのがとても大きく取りあげられて、本に關しての話題と言うと、今年はだいたいそれに集約されてきたと思います。電子書籍元年。ここ20年ぐらい元年って言っていますが、リーダーがたくさん出てますから、本当に元年になるかもしれないですけど。意外にわからないですよ。またスルーしちゃうかもしれない。本について考えたり、図書館について意見を交換したりするためには、いいきっかけになっている年のような気がします。

僕自身は図書館の研究をしてきたわけでは全然ないんですけど、『図書館の学校』という雑誌がありまして、それに10年ぐらい前なんですけど連載していたこともあって、少し日本や世界中の図書館を訪れる機会がありました。当時、イギリスにいましたので、イギリスを中心に古い図書館や、パブリックライブラリーなど、いろんな図書館をみる機会があって、写真を撮ることもありました。その間に図書館で働いている方や、そこで研究をしている方などいろんな方とお話をしたんですけども、一様にやはりどの国に行っても、どの方とお話しても、図書館が好きだといっていたのがとても印象に残りました。ただ図書館が仕事の場であって、研究の場であって、そこで作業するだけではなくて、図書館そのものが自分は好きなんだと。図書館独特の雰囲気が好きなんだということをみなさん一緒におっしゃっていて、それは日本でもそうだと思うんです。当然、自分が行き慣れた図書館っていうのはできますよね。家に近い、あるいは職場にあるとか。そのときに図書館が好きだということが、ひとつ重要な何かを含んでいると思う。なぜ好きなのか。それは単にそこに必要な本があるからだけではない何か、プラスアルファがあると。そこに行くのが好きだとか。それが図書館と人間をつなぐ、そこに行くのが好きだ、そこで時間を過ごすのが好きだとかね、そういう感情が大事なんだということがわかりました。

やはりわれわれが慣れ親しんでいる図書館というのは、西洋の書物の歴史の中から出てきたものですから、最初にそのことを簡単にお話しします。

本のある空間というのは、それが大きくても小さくても、プライベートでもパブリックでも共通の性質をもっているんですね。それは入れ子状をしているということだと思うんです。本をみると扉があって、背があってというふうに、本の作り、デザインそのものがすでに建築的なタームで語れるわけです。日本の美大とヨーロッパはある程度共通していると思うん

ですけれども、もともとヨーロッパの美大や大学では、どこで活字の組み方や、ページ組みや、要は本の作りを習ってきたかと言うと、だいたい建築学科があるところですね。バウハウスがひとつの例だと思うんですけれども、校長はヴァルター・グロピウスという建築家だった。それは歴史を遡っていくとやはり、たとえばフランスで言えば、それはもともと王立図書館であり、印刷所は王立印刷所であったわけです。そうするとそこで使う活字も王製活字ということになります。したがってある活字の設計はルイ XIV 世であればルイ XIV 世が設計させたお城や、庭園や、平たくいうと都市と矛盾するものであってはまずい。ということでは本の設計と製造はある時代の都市の作りと平行と言いますか、それを支える思想は共有されてなければならない。基本的には、それが近代まで受け継がれて、現在でも多くの大学で建築の中に、活字組みや本の設計・造本が入っている場合が多いと思います。そのことをひとつとっても、本の空間は入れ子になっている。本は建築であり、本という建築が図書館という建築の中にある。ある場合には、新しくできた図書館建築が本をモデルにしているというふうに、互いが互いを包含し合うという、そういう構造があるということですね。これが一点目です。

もうひとつはこれも西洋的なモデルのひとつだと思いますけれども、本というのは人間の記憶のモデルとして使われてきましたね。記憶のモデルというのはたとえば劇場とかですね、いっぱいありますけれども、その中でもっとも広く知られている、誰もが容易に思い浮かべられるのは図書館だと思うんですね。人間の知識が本のように蓄積されていると。もちろん実際にそうであるかどうかはまったく別の話です。ただ図書館的な知識の整理整頓の仕方が人間の記憶を語る時に頻繁に使われてきたと。それはおそらくコンピュータが登場して、現代のように巨大な記憶媒体が数千円で買えるようなこういう時代になっても、生きているメタファーだと思います。記憶をデータと読み替えば、データが収納されているように、一人の人間の人生あるいは社会の集合的な記憶もそのようにして整理されていて、それを呼び出すことができる。ただそのモデルに対するアンチテーゼが繰り返されてきたのもやはり西洋なわけですね。

ホルヘ・ルイス・ボルヘスが書いた「砂の本」。あの「砂の本」という短編の鍵になるのは、無限のページが出てくる本を手にしたボルヘスは、怖れをなしてこれを燃やしてしまおうかと思うところなんです。だが、待てよと。無限の本を火にくべたら、そこから無限の炎が出てきてしまう。そうすると図書館がすべて炎上してしまって灰燼に帰すだろうと。ここにはやはりアレクサンドリア図書館の記憶があるでしょう。それでボルヘスは火にくべるのはやめて、図書館のどこかに隠そうと。それで偶然、立ち止った所に手を入れてですね、見ないようにして隠す。それはまさに番地を付けて、つまりあるアドレスを付けたものが呼び出せる、つまり検索できるという西洋型の記憶に対するアンチテーゼではないか。ボルヘスは検索できないようにしたわけですね、少なくとも自分には見つけれられないように。誰か偶然、見つけるかもしれないけれども、それをその場所を言い当てることはできない。ボルヘスは司書でしたから、自分がよく知っているブエノス・アイレスの図書館の迷宮的な世界を自分の言葉で作って、その言葉の中に決して見つけれられない場所を作ったということもできるでしょう。ですから図書館的記憶のモデルには常に、「非検索性」とも言うべきアンチテーゼが存在してきたと言えるのではないのでしょうか。これはグーグルをはじめとする検索サービス全盛の時代にこそ忘れてはいけないことだと思っています。

もうひとつ今日、付け加えたいのは、今、言ったような書物や図書館が灰燼に帰すという点です。アレクサンドリア図書館、炎上した、灰燼に帰した図書館のイメージがあると同時に付随するイメージとして、焚書ですね。本の歴史には本を作るだけでなく、本を破壊

してきた歴史も当然あるわけで、それは焚書の歴史ですよ。焚書に至るだけではなくて、ある本を禁書として地下に隠してしまう。あるいはかんぬきをかけてしまう。そういった歴史もあるわけですね。これは過去のお話ではなくて、たとえば、1990年代にユーゴスラビアの内戦をたびたび取材しましたが、サラエヴォにあった旧国立中央図書館、図書館丸ごとその蔵書とともに灰燼に帰したというあのイメージは、ユーゴスラビアだけではなくて、ヨーロッパの、少なくともヨーロッパの知識人全体に深い傷跡を残したと思います。サラエヴォというのはご存じのとおりキリスト世界とイスラム世界の接点にある、ある意味で中世以来の文明の十字路でした。もう20年前になりますが、アレクサンドリアにはじまる記憶の大きな抹消というか破壊が現代でも起こりうるということをまざまざと見せつけたわけで、未だにその傷は癒えていないような気がします。たとえばフランスの国立図書館は積極的に電子版の構築を進めていますけれども、その電子版の構築を進めるときにレファレンスされるのは、都市としての本がそういうかたちでなくなってしまったという深い傷だと思えますよね。それはヨーロッパの図書館界ではいまだに共有されている負の経験ではないか。図書館のイメージには常に廃墟、図書館の廃墟、書物の廃墟がつきまとっていると、歴史的につきまとっているように思います。戻りますと、本を空間として考えた場合、少なくとも以上のような入れ子構造という空間的特性、記憶モデルとそのアンチテーゼとしての非検索性、そして廃墟のイメージというテーマが出てくるように思います。

さて今日は資料写真を持ってきましたので、それを見ていただこうと思います。最初の写真はロンドンの空襲で、屋根が吹き飛んだ図書館です。



ほとんど灰燼に帰した廃墟なんですけど、そこに人影がある。そんな状態で図書館に本を借りに来てるんでしょうか。『書物の変』の最初に掲載した写真ですが、図書館や本について考えるとき、どうしてもイメージしてしまう情景なんです。

まずは多摩美術大学の図書館です。



伊東豊雄さんの設計で、2007年に開館しました。当時は伊東さんの一番新しい建築で、ご覧のとおり、アーチが内部を作っています。それほど大きな建物ではないんですけれども、壁と柱が一体化していて、端から端まで見とおせる、そういうかたちをもった図書館です。

1階には湾曲した雑誌の閲覧台があります。美大なので美術やデザインなどの雑誌が多いんですね。新刊が届くと、ガラスのテーブルに平置きにします。そうすると世界中から届く雑誌の表紙がずらりと並び、歩くと大体その月に世界中でどんなイメージが流行っているかっていうのがなんとなくつかめると。表紙のブラウジングとしてのテーブルですが、中身を開く時間がない時でも全体の動向を眺めるといふ点では有効だと思っています。

2階もアーチが開放感を出していますが、特徴として書棚がすごく低いんですね。こうすると、書棚にあるすべての背が見渡せる。たとえば一冊の本を取ると、自然に自分が見ている棚の向こう側の棚が目に入る。そうすると、あれこんな本もあるんだなっていうような発見につながるかもしれない。少し棚の配置が変わったりもしましたけれども、これはこれで面白い体験を生むと学生の方から意見があります。ただ本があまり入らないですよ。そろそろ地下の収蔵庫のほうが心配になってきて、デザインと機能を両立させるのはやっぱり大変です。



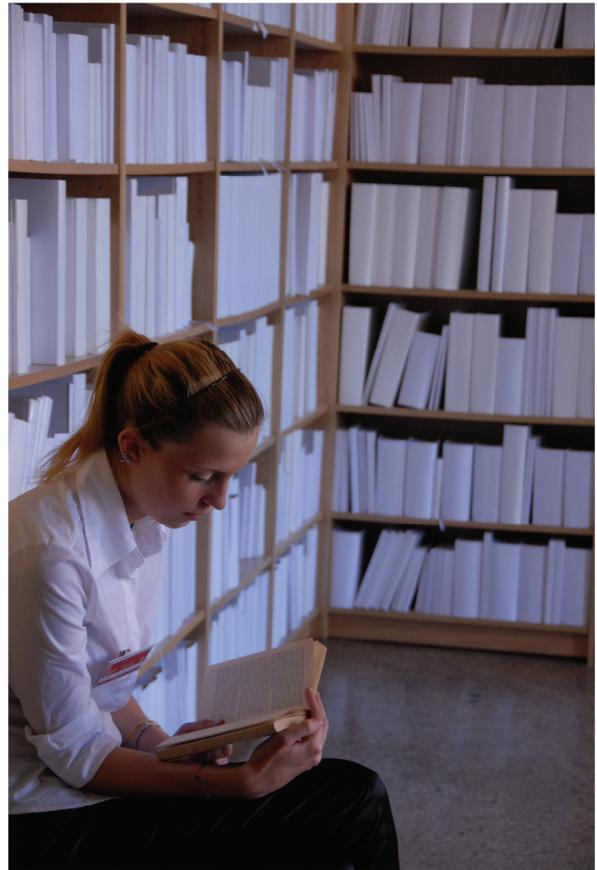
少し現代美術と書物のほうに移ります。『書物の変』というタイトルで2年前に出した本がありますが、表紙に「白い図書館」というキューバの作家の作品を使いました。一見普通の図書室に見えるんですけど、すべての本が無地なんです。驚いたことに、本の形を微妙に変えていて、いわば「束見本」でできた書棚のようなものです。印象的だったのは、美術展なので必ず見張りのバイトが座っているんですが、その子が読んでる本は、白くない。ちょっと工夫して、『書物の変』では彼女が読んでる本に帯がかかって、そこだけ隠されているようになりました。

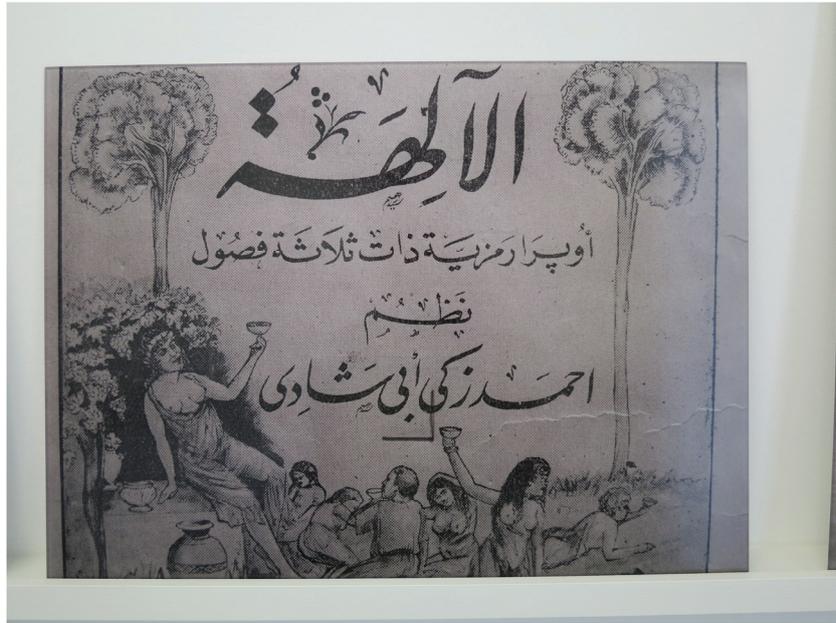
次はアンセルム・キーファーです。オーストラリア南部にタスマニアという島がありますけれども、そこに昨年、開館したMONAという新しい美術館に設置されたキーファーのオリジナル作品です。

総重量5トンの鉛の本で、キーファーの代表的なシリーズのひとつですね。鉛の本の間にガラスが突き刺さっている。これが美術館の図書室の中に展示されています。その隣に岡部昌生さんとのユニットとして共同制作した、広島の被爆した石とそのフロッタージュが設置されています。訪れた人が被爆石の痕跡を擦り取り、これを図書館に収蔵してゆくという、生成型のインスタレーションです。キーファーの作品とともに、書物「アーカイヴ」というテーマが図書室のなかにあるわけです。

さて現代美術では、今年ドイツのカッセルで5年に一度開かれるドクメンタが話題になりました。とても大きな催しなんですけれども、蓋をあけてみたら図書館や書物をテーマにした作品が本当に多かった。僕は福島放射能汚染をテーマにした映像作品を通して参加したのですが、全体を見ていて、戦争、紛争、自然破壊などさまざまなカタストロフに対して、どのように記憶を守るのかという点で、偶然そのようなテーマが出てきたのかなと思いました。

たとえばパレスチナにあった19世紀にできたある図書館をモデルにして、その図書館にあった本の奥付を展示しています。





当時のパレスチナではいろんな所から本を寄付したらしい。その所有者の名前が全部書き込まれているんですよ。誰がどこで買った本だといろんな言葉でその本の履歴が書いてあるわけなんです。もう今は散逸してしまったんですけども、それを丹念に撮影して、写真作品と本の履歴の要約が添えられて展示されています。このように当時の本の奥付というのはそれ自体が独立したデザインがされていて、これに誰々が何月何日に買った蔵書であるというスタンプが押してあります。本の履歴自体が歴史になっていて、ここからパレスチナの近代史が全部でてくるよといったような、いい展示だったと思います。

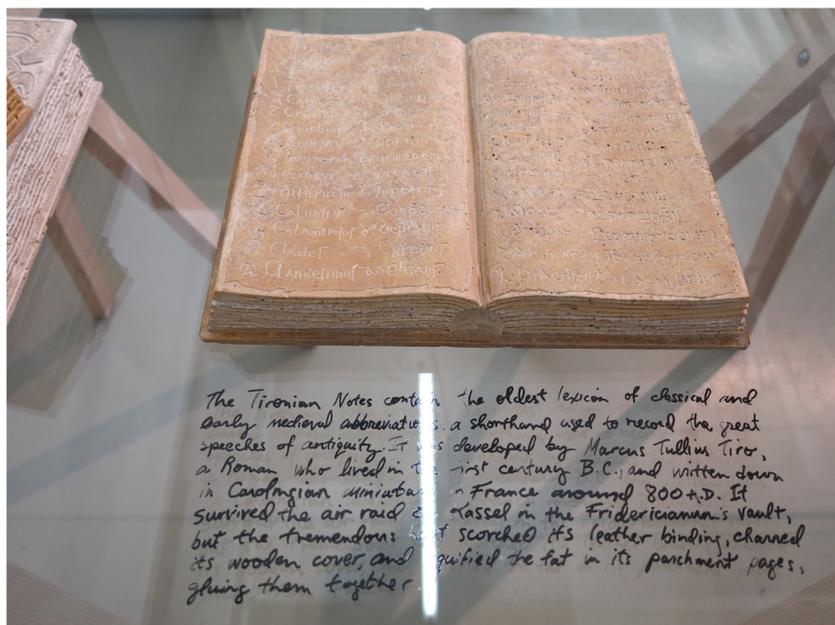


この塔の一番上なんですけれども、奥付の一部を英語とアラビア語で横断幕にしています。これは市内のどこからでも見えるような高いところなので、これはひとつのメッセージになってくる。「この本はアタラ・サイードに帰属する本。彼はこの本を自分のお金で買った。1892年ガザ」ここ数日のガザの空爆のニュースを聞くたびにこの展示を見た誰もがこの本を思い出さずんじやないかと思います。

同じ建物の中でしたが、テーブルの上にたくさん本が並んでいます。周りのガラスケースの中に遺物みたいなものが並べられています。これはアフガニスタンのバーミアン石窟寺院、タリバーンに破壊された大仏、あの場所から爆破で粉々になったさまざまな物を持ってきて展示している。そこは石の産地でもあって、石工さんたちに頼んで作ってもらったのが、テーブルの上の本なんですね。何の本だろう。実はひとこと言えば「燃えカス」の本なんです。



燃えカスというのは、展覧会があった場所にあった図書館の本なんですね。カッセルもまた1944年に連合軍に空爆されます。空爆したのはイギリス軍だったと言いますが、それで図書館はやはり灰燼に帰すわけですね。そこにはヘブライ語を含む中世以来の貴重な書物がたくさんあった。かろうじて救出されたその燃えカスの本をアフガニスタンの石工たちに見せて、これをモデルに石で作ってくださいと頼んだわけです。



本に見えるんですけど、石なんです。たまたまその石がピンクがかった花崗岩らしくて、あたかも古い羊皮紙のように見えるんですね。ページもすごくよくできていて、1枚の石から削り出しているんですが、今はもう存在していない書物が石の記念碑になっている。



ということで2つの国，ドイツとアフガニスタンの2つの時間，1945年と1990年代，2つの時代の破壊をこういう形で結びつけるアートプロジェクトとしての，石の本の図書館が作られていました。

その隣のビルディングにはこれも少し変わった展示なんですけれども，「木の図書館」ですね。



木のキャビネットに本が並んでいる。本を取りだしてみると蓋が開いて，中に木の枝が入っているんですね。



18世紀にとられた木の標本なんだそうです。木の標本を、木で作られた箱に納めて、箱の裏側に木の説明が書いてあるんですね。それを何百と作って納めた。これが博物館のコレクションになったそうで、このコレクションを一般に公開したいということで、美術家のマーク・ダイオンに委嘱して作られたのがこの作品です。背表紙だけをみると本当に本のように見えるのですが、全部、違う木でできている。古いので、ちょっと痛んでいるものも多いんですが。まさに本がどこからきたかという来歴を示すと同時に、本が集まると森になる。本が森の形で保存されていると。さっき最初に言いましたとおり、本の空間が入れ子の構造を作ってしまう例のひとつと言えるかもしれません。

これは展覧会のカタログを閲覧するスペースですが、奥の壁が本でできている。正確には本をレンガにして漆喰で固めている。第5回目のドクメンタで制作されたもので、それを今回、閲覧室に持ってきて再展示したということでした。

こんなふうの本や図書館やいろんなものが偶然出てきたのは、ひとつにはやはりカッセルのドクメンタがはじまった、第2次大戦の過去に対する反省からはじまっているわけですね。ドクメンタというのはヒトラーが行ったいわゆる「頹廢芸術展」に対するアンチテーゼとしてはじまったということもあって、ドイツが背負った、負の記憶という過去を、どういう形で未来に隠蔽することなく活かしていけるかという、美術が美術に対して行ったかなり過酷な挑戦として、アーカイブが意識されてきたということもあるでしょう。ただいろんな国の作家が似たようなテーマで作っているわけですから、そこには電子化される書物の世界の状況とか、あるいは度重なる戦火によってまだまだこの時代に本や知識が圧殺されているというような状況があって、それに対するひとつの反応として出てきたようにも思います。



これが最後の資料になりますが、細長い部屋に入ると、紙でできた巨大な「彫刻」に出会います。アメリカの雑誌に『LIFE』という雑誌がありました。グラフ・ジャーナリズムの代表的雑誌ですけれども、その『LIFE』のすべての号に掲載されたイメージ、特に写真ですね、それをすべて切り抜いて竹串につけて、それを立てて展示したものです。



これはすごい。スターや特集だけでなく、広告の写真も全部載せている。最初はモノクロ印刷なんですけれども、当然、カラーになっていく。広告の中に出てくる商品が変わっていったりするんですよ。長さは何十メートルなんですけど、そのちょうど折り返し地点で日本カメラがたくさん出てくるんです。ある時代になるとファストフードが出てくるとか、やっぱりゆっくり見ていくと時代の変遷が如実にわかるんですね。日本の図書館にも『LIFE』が揃ってるところはいくらでもあるんですけど、それを全部見て発見する人はいないでしょう。入れ子構造の特性として、それを展開すれば別の空間ができるということですね。雑誌をこういうふうに展開するとそれ自体が建築的になる。その逆もできるわけで、ある破壊された建築を本の形に、あるいはひとつの森を図書館にというふうに、常に次元を往復しながら空間化していけるというのが本の空間というか、図書館の空間の面白いところかなと思います。

河野哲也氏 「思索と対話をこえて」

河野先生：文学部の河野です。さきほど申しあげたように、本来の専門は哲学なのですが、でも、『レポートの書き方』の著者の河野さんって哲学もやってらっしゃったんですね』って言われることが多くてですね。実は逆なんですよ（笑）。今日はそれがもしかしてひとつにまとまる話ができたらいいなあと思っています。港先生、今日ご一緒させていただいて本当に光栄です。私は「人間の心とは何か」ということを哲学的に考える研究をしているのですが、港先生の映像と記憶の議論というのは本当に参考になりまして、何度も自分の本の中で引用させていただいています。今日はご一緒させていただいて大変に嬉しく思います。

お話を聞いていて、今日のテーマとしてまず自分がどんな図書館を体験したかなっていうところからお話ししたいと思います。さきほど港先生がおっしゃった図書館がもっている物質性と空間性、そしてそれが実は記憶であるということ。つまり、記憶がもっている「物（もの）」性というのを指摘されていると思うんです。記憶とは抽象的な何かではなくて、具体的な物なのだということ。私たちは頭の中にある抽象的な記憶と物みたいに考えるのですが、そうではなくて実は本自体が心の外在化なのです。実は本が無いと、外在化した物体が無いと、私たちの記憶というのは成り立たないんだというお話になると思います。

さて、そこで私の図書館体験なのですが、港先生ほど世界中の図書館に行っているわけではないですが、カナダのトロントに研究休暇で行ったときにですね、トロント大学図書館をしばしば利用しました。在籍していたのはトロント大学とは別のヨーク大学というところでしたが、トロント大学のロバート図書館、これが大きいんですね。一千万冊の蔵書があってですね、池袋の東武デパートか西武デパートぐらいあります。北米第三の図書館なんですね。

そこで感動したのは、本の量だけで言えばもしかしたらパリ大学全体のほうが多いのかもしれないですが、やはりすごく利用しやすいんですね。本も図書スペースはたくさんあるんですけども、それと負けないくらいに学生とか、教員が使う部屋が充実してですね、そこに自分の本を持ち込んでキャレルに小さい書斎を作ることができるのです。市民証や学生証を見せるとすぐ利用証を作ってくれて、本を貸し出してくれます。大学の研究員になればキャレルも貸してくれるというアクセスのしやすさです。ところが、ただ制度がすごいというよりもライブラリアンもすごいのです。こういったテーマのものを集めたいんだけどとか、こういうのを研究したいんだけどとかいうのも、しばらく待ってるうちに全部用意してくれて、キャレルの中に用意しておいてくれるんですね。つまりさきほど先生がおっしゃったように、ボルヘスは名作ですよ、見つからないようにどこかに本を置くと。私たちもどこかに記憶したんだけど、もう二度と見つからないような記憶ってあると思うんですよ。それが集合的にあるのが図書館だとすると、その全然見つからないかもしれない物質性というのが、豊かさであると同時に、逆に言うと全然見つからないってことは利用できない記憶になってしまう。それを思い起こさせてくれる人としてライブラリアンがいるということだと思うのです。ものとしての図書館と、利用者としての私・個人の間で立って、記憶を思い出させてくれる装置、情報をつなげてくれる装置、装置という言い方は

図書館体験

- ▶ University of Toronto Libraries
- ▶ 北米第三の図書館
- ▶ 10 million bound volumes and 5 million microform volumes



人に対して失礼なのかもしれませんが、そうした役割としてライブラリアンの方がいらっしゃるのです。

私は学生時代に、ベルギーにあるルーヴェン・カトリック大学に留学していました。トロントの巨大な図書館と比べると、私が利用していたのはとても小さな図書室とコレクションでして、蔵書数は比較にならないんです。けれども、レファレンス・コーナーの助手さんが非常に優秀な方で、そこで調べたい本があるとキャレルに置いてくれて、必要なコピーまでしてくれる。このレファレンスの助手さんは、もちろん図書室に勤めているのですが、同時に哲学科の博士課程の院生かオーヴァードクターか、でもあるんですね。そうすると、「ハイデガーのこういうテーマで論文を書こうと思っているんです」とかいうと、「ちょっと待ってください、明日までに用意しておきます」といってくれて、その図書室は、この30人教室くらいの蔵書スペースなんですけど、それでも用意しておいてくれるのです。これは私だけの特権ではなくって、院生とか研究者であればみんなやってくれました。こういうサービスっていうのは、ヨーロッパの図書館では普通にあるわけですね。私の弟は理科系の人間なのですが、短い期間、アメリカに研究に行ったときに、もう実験助手が指示した実験を勝手にやってくれて、図書館の司書が雑誌を全部集めてくれるのだそうです。そうすると数日でデータが集まってきて、必要な論文資料が積まれているので、あと自分は書くだけっていうのです。だから、日本だったら1年かかることを1か月でできてしまう。到底かなわないのだそうです。カーレースで言えば、スタッフとエンジニアがマシンを全部チューンアップしてくれていて、あとは運転すればいいっていう感じに環境が整っているのですね。日本だとドライバー自身が自分で部品を磨いているような状態で、できる仕事のスピードは全然違うのです。研究者は、資料を集めることに関しては自分の専門分野しか知らない。幅広い情報収集という点については、素人なんですよ。図書館の方は、あらゆる資料を、本と雑誌のみならず知っている。分野によっては、港先生がやっている分野だと写真とか映像とかいろんな資料を集めなくてはいけないことがあるんだと思います。分野によっていろんな領域を横断して調べなければいけないこともあると思います。研究者にはそうした横断的な調査をすることが難しい。それをやってくれるのが司書の方なんだなあとと思います。

次に本とは何なのかっていうことお話ししますと、さきほど港先生がおっしゃったように、外在化した知識ということが出来ます。これを科学哲学では「物化した知識」とかいたりします。ところが本は物化した知識ではありますが、人間の一部でもあるんですね。私の研究室にある本をとってしまっても、さらにコンピュータが無くなると、たぶん私は何もできなくなりますね。授業さえできなくなります。したがって本自体が私の心の一部であるし、逆に言えば、本は人の心なのです。港先生が書かれた本は、港先生の一部が外在化していて、私たちはその一部を取り込んで自分のものとして利用していると言えるでしょう。したがって本は独自のポジションをもって、人と人をつなぐ媒体だと言えます。そしてそれを共有することによって人間同士が繋がることができると思います。

そこで私が関わっている分野、特に教育学の分野でいうと、次のような新しい知識観が生まれています。つまり、知識というのは私たちが暗記をして、脳の中に蓄えるようなもので

本って何？

- ▶ 外在化した知識
- ▶ 物知識: 物の形をした知識。機器や道具は、理論や言語表現と並んで知識を担っている。
- ▶ 本は人の一部
- ▶ 人間の一部を物化したものである。記憶、思考法、推論過程など。

はないのです。こうした形で知識を蓄えるには、私たちが生物の個体としてもっている能力は弱すぎるのです。そうではなくて、私が覚えているべきことは、こういう仕方

で調べると必要な資料がでてくる検索方法だけでいいのです。そして知識の中身は人間の外にあるわけです。そうした外にある知識を利用して、私は講義をやって講演をしている。実際このパワーポイントが無くなっちゃったとなると、話すのが難しくなってしまう。私たちは新しいことを覚えるのにメモを使う。そういう形で知識というのは個体のみならず、環境中に外在させる形で構築されているのです。港先生の記憶論にあるように、外在化した知識はいろんな形で存在します。本もそうでしょうし、共通のモニュメント、建物自体に記憶があるとも言えます。そして町自体に記憶があると言ってもいいと思います。町自体が情報をもっていて、私たちはそこで住むことによって、町の来歴というのを知らず知らずのうちに自分の中に取り込んでいて、その中でインタラクションをして自分の在り方を決めているのです。ここから理解というのは何かというと、昔ながらの考え方で、何かを記憶してそれを頭の中から取り出すということではなくて、外在的な知識にアクセスしてその利用の仕方を知ることなのです。インターネットの時代なので、あたりまえかもしれませんが。したがって従来の知識観というのはいわゆる暗記中心であって、どれだけ自分の中に蓄えたかという競争になっていきます。しかし新しい考え方では、知識というのは、小学校から大学まで知識を自分でアクセスしやすいように構築していく過程になります。自分の中に必要なのは、予想したり推論したりする思考力で、記憶や知識は外在化しておけばよいことになります。

たとえばちょっと思い出すのは、パソコンでマウスを使ってぱっぱと使えるタイプって、91~92年ぐらいに出たアップル II がはじめてだったと思います。ちょうどそのとき私は留学から帰ってくるところで、ベルギーの大学の購買部に山積みになっていて、「これはいかん、帰ったらすぐ買うぞ」とそのとき思った記憶があります。その前はですね、留学するときの海外とのやり取りは手紙でやったんですけれども、相手の教授にあなたのところ勉強したいので、というふうに手紙で送って、結局やりとりで2か月以上かかったんですね。今だったら同じようなやり取りが2日で済みますよね。インターネットって本当にすごいなと思います。あるいは、昔は本を検索する技術というのが院生にとって重要な技術だったんですね。見当をつけて、図書館に行って、棚を見て、周りにある本を一緒に見るっていうことはすごく大切な技術だったんですけれども、今は本当に簡単に検索できるようになりました。昔は手書きで本の引用をメモしてたんですけれども、今は、スキャナーでパソコンに取り込むことが簡単にできる。したがって手作業がどんどん減る、と同時にそういったパソコンのスキルをもっているのが大切だということなのです。

そうしたネット時代に図書館の役割って何なのかなと思います。素人考えで大変お恥ずかしいんですけども、当然のことながら図書館は本の物置ではないわけです。かといって無料貸本屋さんでもないだろうと思います。日本の公共図書館だとどうしてもベストセラーを借りるっていうのが多いじゃないかと思うんですね。それはそれで悪くはないんですけども、やはり大学の図書館にしる、市民図書館にしる、図書館とは研究室じゃないかと思うのです。図書館の機能というのは、図書の貯蔵や貸し出しもあるのですが、本当は研究室の

従来の知識観 新しい知識観

- | | |
|------------|-----------|
| ▶ 知識伝達 | ▶ 知識構築の促進 |
| ▶ 記憶中心 | ▶ 推論と情報探索 |
| ▶ 教師中心 | ▶ 学習者中心主義 |
| ▶ 排他的競争主義 | ▶ 協同的 |
| ▶ スケジュール主義 | ▶ 機会をとらえる |
| ▶ 事実中心 | ▶ アイデア中心 |

一部なのだと思います。研究が「勉強」と違うのは、研究の本質は発信にあるからです。発信するために何か本を読んだり、調べものをしたりするのは、勉強というのは自分のためにするものです。自由に本を読んで、ああ面白かったなあと思う。ある意味で行き当たりばったり好きな本や好きな映画を見て、好きな写真を見ていく。それもいいんですけども、研究というのはアウトプットというのを最初から考えて、そこで必要な資料を集めることから始まる。ただあまりにも必要なものだけに資料を絞ってしまうと研究の内容が細くなってしまいます。それで、豊かなセレンディピティというか、偶然の発見というのがあります。研究の資料を集めていかないといけない。したがって図書館に集まっている資料というのは、それを想起できるから思い出せるから記憶と言うんであって、永遠に思い出されないボルヘスの「砂の本」があるとすれば、それは記憶なのかどうかさえ定かならぬものだと思います。発信していくことにつながらなければ、記憶とは言えないんじゃないでしょうか。逆に言うと忘却してしまうっていうことは、もう二度と探し当てられないとか、本が焼けてしまうというのは、拡散してしまうということだと思うのです。忘れてしまうというのは、自分の心のなかの記憶でも、図書館でも同じことですけども、何かが拡散してしまうこと、つまり関連性がなくなってしまうことだと思います。あの本がどこに行ったかわからない。何があるのかわからない。そうした関連性がなくなってしまうということが忘却なのではないかなと思います。逆に思い出すということは何か。それは関連性を作るっていうことなんじゃないかなと思います。町を歩いていて、昔こういうことあったなとぱっと思い出すことがあると思うんですよね。ブルーストの『失われた時を求めて』じゃないですけども、紅茶に浸したマドレーヌの匂いで、ぱっと昔のことを思い出す。そうしたことはよくある話だと思います。それは何かの関連性がついた、現在の匂いと記憶された匂いに関連性がついたということです。記憶ってというのはそういうふうに関連性がついてこそ利用可能になる。ではその関連性をどうつければいいのか。そうじゃないと、資料とはただ置いてあるだけになります。関連性を誰がつけるのかというと、これが最初に申し上げたようにライブラリアンの大きな仕事なんじゃないかなと思うんです。

ライブラリアンというのはある意味で研究者以上でなければならないという感じがします。研究者というのはどうしても専門を中心に研究をして、大学では教育が重要な役割になってしまいます。そこで、専門が全然違う資料が一堂に会していて、いろんなものが集まっています。集積されているのが図書館です。それは本だけではなくて、いろんな情報が集まっています。すぐれた大学の図書館、たとえば、トロント大学の図書館とかそうですが、レファレンスコーナーが巨大なんです。何を調べますか？って言われて、研究テーマを言うと、「う～ん、どんな感じの論文を書かれるんですか」と言われて、「こうこうこんな感じですよ」と、「少し待ってください」っておっしゃって、しばらくすると参考文献のリストを出して、「この中で必要なものを教えてください」と言ってくれる。そこで「この本があります」と、「この本はオンタリオ州にはなくて、スウェーデンの何とか図書館ってところだけがもっています。それを読みますか」と言われて、「あ、じゃあ読みたいです。どのくらい時間かかりますか」と、「2週間です」と。日本だと国内でも1か月ぐらいかかっちゃうんですけど2週間で来ますというのです。他のオンタリオ州の図書館にあるものなら、2日か3日で全部、揃いますというのです。それで例のキャレルの中に全部納めてくれます。そうした場合、私の専門の中では関連性を知らなかったような資料も、ライブラリアンの方が知っていて結びつけてくれるのです。いわば、自分ひとりでは思い出せなかったものを想起させてくれるのです。眠っていた巨大な記憶から想起させてくれるということです。したがって研究のための図書館というのは、アウトプットからインプットまでを循

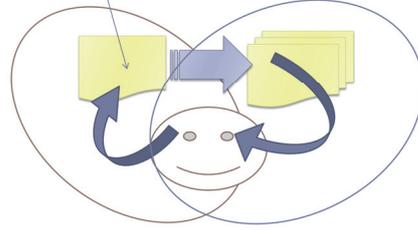
環として考えるべきなのです。

この観点を私の専門のギブソンの生態心理学から考えてみたいと思うんですね。生態心理学にはアフォーダンスという概念があります。アフォーダンスとは、私たちの行動を可能にしてくれる環境がもっている特性であり性能です。たとえばその上を歩ける面というのは歩行や移動をアフォードする。壁というのは移動の妨害をアフォードする。穴は身を隠すことをアフォードする。握れるものは投げることをアフォードする。環境のもっている性能が、私たちの行動と心の働きを可能にしている。ナイフは切ることをアフォードする。火は寒い時に暖をとることをアフォードするけれども、触るとやけどもアフォードする。毒は病気をアフォードする。深い水たまりは溺れることをアフォードするが、水浴びすることもアフォードする。身長とかによってもアフォードするものは変わってきます。アフォーダンスとは何かというと、生態心理学では有名な概念ですが、環境がもっている性能で、それを私たちは利用することによってはじめて行為が可能になってくる。

じゃあ図書館っていったい人間の何をアフォードするのか。図書館というのは人間にとってどのような関係をもたらし環境なのだろうか。あたりまえですが、それは知的生産を可能にする環境のはずです。図書館というのは利用者にとって、情報のインプットの間であると同時に、アウトプットの間なのです。私たちは図書館で調べものをして、論文を書くわけです。するとその論文が次の何とか雑誌に載っている。あるいは本を書くとそのほかの図書館に収まる。したがって、情報の発信者にとっては、図書館はアウトプットされる場であると同時にインプットされる場でもある。図書館は本を収集することによって情報をインプットするんですけども、利用者側がどんな利用をしたがっているかということも蓄えていくと、情報についての情報が得られるでしょう。どの本が何度借りられたか、どういう形で、どのくらいの期間借りられたかが分かるでしょう。これは情報についての情報です。図書館にとってのアウトプットというのは本を貸し出すというだけではなくて、再び図書館に返ってくるような形で情報のアウトプットをすることが重要じゃないか。いい図書館というのは、たとえば、トロント大学図書館とかはいい情報を溜めているわけですね。そこでは、情報の有効な扱い方についての情報、つまり、このような検索の要請があったときにはこういうふうにして対処しますっていう情報も記録されているわけですね。情報のメタ情報です。

まとめますと、結局、本というのは書き手と読み手が循環的に関わるものです。読んだことによって読み手が変わると同時に、読まれることで書き手も変わってくる。その本というのは媒体として人間をつなげているものなのです。あるいは私たちは、本という体の一部を共有していると考えていいでしょう。本という外在化された身体を通じて、何十世紀も前の

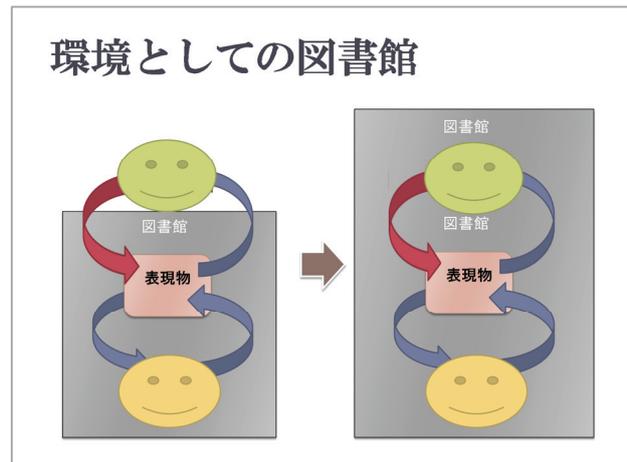
- ▶ アフォーダンス: それに対して動物が関わる(行動する)ことで、ある出来事が生じるような環境の(潜在的)性質
- ▶ 薄い氷は、「その上に乗る→割れて水に落ちる」ので水中落下をアフォード。
- ▶ 分厚い氷は「その上に乗る→そのまま歩ける」ので、移動や支持をアフォードする。



情報が成長する環境

- ▶ 図書館にとってのインプットは、図書を収集することだけではなく、利用者とのインタラクションにこそ情報についての情報が隠れている。
- ▶ 図書館にとってのアウトプットは、図書を貸し出すことではなく、インプットをアフォードするようなアウトプットでなければならない。
- ▶ 図書館に収めてある情報は、人を經由した世界についての情報なので、図書館の最終的な目的は利用者を経由して世界を変えることをアフォードすることにある。

外国の人と私がつながっている。よって、人間関係を豊かにして、自分を成長させる環境として図書館はあるのだらうと思います。思い出せないと記憶は潜在的なままです。図書館に蓄積されているものの豊かさは大切なんですけど、一方でそれが利用可能になるためには誰かがそれを思い出さなきゃいけない。ところが、図書館利用者が必ず思い出せるとは限らない。とすると、利用者が利用したいと思っているものと、図書館の中にある情報の記憶を有機的に関連させる。この役割こそが、図書館司書の役割なんじゃないかなと思うんです。これをたとえて言うと、記憶装置にばかり記憶が入っていて、私はコンピュータを使おうとする。コンピュータの方から情報を取り出すのに、コンピュータに情報を打ち込まないといけない。そうして、引き出すために情報を打ち込むことで、コンピュータの記憶が豊かになっていく。この循環は、情報そのものが成長していく過程として考えることができるわけです。人間の知的環境としての図書館があるのですが、図書館の側から見れば、人間が関わることによって、その図書館という知的環境の方が豊かになっていくのです。情報が成長していくのです。そのような情報が成長する循環を作り出すものとして、情報を意味的に関連させる役割が図書館の専門の方たち役目のはずです。



特にインターディシプリナリーな研究、学際的研究の重要性が最近言われます。それで学部同士のアイデンティティの問題とかが、文学部でもしばしば問題になるんですけども、学部との壁などは学者が勝手に作っているものであって、知識に境があるわけではないですよ。日本の小学校だと国語算数理科社会みたいな科目別教育をまだやっていますけれども、他の国では算数とコンピュータ以外は総合的な学習の時間ばかりいう国はかなりありますよね。日本はまたせっかくそういう方向性を取りはじめているのに、またもとに戻ろうとする傾向がありますね。すでに遅れているのに、これでまた2、30年遅れて、先進的な国からは二周回遅れぐらいになってしまうんじゃないかなと思います。では、どうすればいいかというと、総合的な学習の時間には当然ながら経験・体験学習も必要ですけども、同時に知識の検索力が必要です。知識を見つけ出し、活用する能力です。それを教えるには、学校の先生がライブラリアンの能力をもっていきなさいいけないということです。知識を一方向的に教え込んだら、子どもの思考力も探究力も全く育たない。むしろ先生がライブラリアンのような能力をもって、子供たちが自分の研究をしていくうちに、こういう関連があるんじゃないっていうようなことを示唆していく。鋭いライブラリアンのような先生がでてくると、総合的な学習の時間ってどんどん発展して行って、それが子どもの大きな成長につながっていくでしょう。即戦力っていう言葉がいいかどうかはよくわからないけれども、大学にそういう人が入ってきたら、もう一緒にすぐ研究できそうです。やりたい研究があっても、一緒にやってくれる学生と院生が少ないので、一人で一杯一杯になっているというのが私の状況なのですが、同じ問題をもっている先生も多いと思いますね。探究力のある学生とどんどん一緒に仕事をしていく。そんなことを理想としているのですが、そこでも集団的な研究を関連させていくのも、ライブラリアンの役割でしょう。教育学科の人間としていうと、将来的には、学校の先生、小・中・高の先生は優れたライブラリアンみたいな方になっていただけると、すごくいいなと思います。今のやり方みたいに、教科書に書いてあることを覚

えて、それを思い出せるかテストするといったことを反復していても、つまり、同じことをインプット・アウトプットしても何の情報も増えません。それはそうですね。教科書に載っていることをインプットして、それをそのままアウトプットしても、何も豊かになってないわけです。情報量としては何も増えてないですよ。したがってそういう教育というのは、そもそもダメなんだと思います。図書館は、今の図書館がさらに豊かになっていくような形を考えなければいけないと思います。図書館が環境だとすれば、その環境の側が、やってきた生き物を利用して豊かになっていく。森が、森に住む生物を利用してもっと豊かな森になっていく。では、森が豊かになっていくにはどうしたらいいかという、やってきた小鳥やタヌキのために何ができるかを考えることだと思います。私からの話は以上です。ありがとうございました。

フロアとの対話

司会：はい、では後半に入りたいと思います。みなさまからのご質問の紙をいただきましたので、港先生と河野先生にそれぞれ質問のほうをさせていただきたいと思います。その後フロアのほう、から何かそれ以外にご質問がありましたら、どうぞ自由に発言していただきたいと思います。最後にほうにも、紙には書いていないけどこれは聞きたいということがありましたら、お聞きいただきたいと思います。

港先生：はい。質問をたくさんいただいて、まとめきれんかわからないんですが、まずタイトルの「逸脱する図書館」っていうのはなんですかという質問なんですけれども、今日キャンパスに入って小さな看板が出てましたよね。その横に大きな河合塾の看板があってですね、横にちょっと「逸脱する図書館」っていうのがあって、その面白さだと思います。キャンパス、大学っていうのはやっぱり逸脱の場所なんですね。逸脱する場所だから、休日にも使われる場所は使われるわけで、テストに使われたり、資格試験に使われたり、そこに逸脱って書いてあるというそのインパクトですね。その想起させられるというのは。そして知識の創出をする場所としての図書館と面白い体験を生む場所としての図書館は相反するのかわからないのかという質問ですけれども、これは相反すると思います。やはり。これはどの図書館に行ってもまず「サイレンス」が求められるわけですよね。本を読んで書く以外のことはしないわけですよ。それ以外の体験をしようとする、それは当然それだけで逸脱してしまうということになります。ただそれを相反しないようにしなければならぬのが図書館に向けられたひとつの要求であり課題ではないかと個人的に思います。

というのは、次の質問ですけど、今の社会、特に電子化されたネットワーク、テクノロジーがこんな速度で進展していく中で、建築とメディアも変わってきている。そこでものをつくるということ、図書館が発信するということはどう考えたらいいのか。建築とメディアの変容をどう考えるのか。そこと今の、両立させるということはやはりセットだろうと思う。ひとつは多摩美術大学の図書館ができたときには資料を持ってきて、その資料を使いながら学生がグループで企画会議をできるようなスペースを設けたいし、設けなければならない。やはりまず図書館の中の資料ですから、外に持ち出さないようにしなければならない。大きな資料もありますし、雑誌のバックナンバーもありますから、それを持ってきてそこで話すことができる。モニターがあって、コンピュータをつなげてというラボというスペースです。最近の使用頻度は高くて、予約しないと使えないようですが、それが僕らが考えた「創

造する図書館」の第一歩だった。一言でいえば、今では知識の大きな部分を電子的なデバイスに負っています。昔はノートと鉛筆でよかったわけですがけれども。そうではないわけですよ。それに対応するような建築空間を作っていかなければならない。特にわれわれのような文字だけではなくて、音なり、イメージなりを扱う場合は、そのための機能を図書館がデフォルトとしてもつ必要があると思います。

質問者A：すみません。今の質問をした者なんですけど、ちょっと補足をすると建築とメディアの関係ということで書いてしまいましたが、その前提としては港さんがやってきたある種、考古学的な、文字の成り立ちであったり、洞窟の壁画の話だったり、図書館の話につながる話だったりというのは、ずっと知識・記憶をメディアに定着化していくかっていう話をなされている。一方で河野さんはその歴史の在り方の原因みたいなものを生態心理学的な、ギブソンの概念を使って書かれているなどと思って、そこは面白いなと思ったんですね。そうなるって知識ってというのは、そんな本や図書館の中にはないんですよ。人の頭でもない。どこにあるかっていうと環境の中にあるという話ですよ。そうなったときに図書館がいまだに館、建築にこだわって作られていることが不思議でしょうがない。今日お二人の中でつながっている部分というのは、司書のみなさんにもそういうことを考えられていると思うんですが、そう言いながら図書館が旧態の建築というか、本というメディアにこだわってしまうところにごく疑問があるし、その辺をお二人ならばそうではないよっていうところをたぶんおもちだすと思うんですよ。やっぱり図書館の館ってというのがもうまずいんじゃないか、翻訳として。library っていう言葉をそのまま使ってもよかったのではないのでしょうか。この質問ってというのは、そういうことをお二人なら誰よりも答えていただけるんじゃないかなというところがあつた質問ですので、このことをふまえてお答えいただけたらなと思うんですが。

港先生：ただ個人的なスタンスでいうと、「館」も好きなんです。それで館がもってきた歴史、まさに洞窟からはじまる歴史も好きでありまして、こう言っていいかもしれないです。知的な生産について言えば、90パーセントぐらいは非物質化された本に頼っていると思うんですよ。現実には。それは原稿を書くときも、取材したり写真を撮ったり、それを発表するときも、電子情報化された環境のなかで考えたり作ったりしている。言い換えれば、非物質化されていなければ、こういうスタイルやスピードでは、とてもできないことがたくさんあると思う。ただそれが100パーセントになって、すべてが非物質的空間のなかだけで完結してしまうと失われるものも大きい。たぶん情報化の後には、社会もそういうことに気づきはじめてもいると思うんですね。

これは河野先生に質問なんですけれども、ギブソンの研究がはじまったのはやはり20世紀的な、建築でいえばインターナショナルスタイル、それが背景になっているわけです。そうすると、物理的な建築、当時のガラス、光、照明ということが当然、彼のアイデアはそこから出てきているわけですよ。そうすると当然、今の光は彼の見ていた光とは違う。地の底から取り出された物質が発光する冷たい光ですよ。液晶にしるLEDにしる。それはある広がりをもたないわけです。そういった今の状況はアフォードするんだろうか。さきほど3つの例はわかりやすいですね。地面・壁・崖ですが、情報化された地面、壁、崖、つまり物理的な性質を欠いた環境はアフォードするの、しないのかですね。それはひとつ今日の対話として面白い論点かと思います。そうなったときに、形も大きさももたないものでできている図書館の「館」が、何をアフォードするのかということ。本当に「館」がなくなっても大丈夫なのでしょうか。

河野先生：今、確かにギブソンは固有の限界があると思いますね。アフォーダンスという概念は広がりがあるんですけども、彼のもっている制約性というのは、特に変化する環境が扱えないということです。意外と彼が想定しているのは変化しない知覚風景なので、さきほど言った壁とか崖とかそうですね。さきほど私が自分の話のなかで考えたことは、みんなどの場所が自分の発想が一番豊かになる場所だと思っているのかなということなんですね。私、研究室では一切研究できないんですよ。事務仕事とか、学生の点数付けるとかの作業は研究室でやるんですけどね。研究はなかなかできないんですね。自宅か図書館でしかできないんですね。こういった形になったときにその人の発想が一番豊かになったり、よいものを書けたりするのかっていうのは、結構、人さまざまです。さきほどトロント図書館が良かったのは、キャレルがパーテーションで仕切られていて完全に個室なんですね。しかも1ヶ月も借りられるので。そうすると自宅の環境というのをその中に作ることができるのですよね。それが私にとって一番使いやすかったんです。今、自宅は湘南なんですけど、本を20冊も30冊も抱えて移動しなきゃいけないのですが、その面倒くささが、トロントではありませんでした。もうひとつはさきほども言ったように、私が博士論文を書いていたベルギーの図書室は非常に高度に心地よいところで、自分のいる院生室と図書室が接続していて、図書室の人にいうと、本館からいろんな資料をもってきてくれます。その意味で、司書の方がとても優れていたなあとと思います。まさに問題は人だなあと感じたんですね。いろんな情報をつなげてくれて、こういう資料はどうですかって持ってきてくれる。頼んでもいないのに。それは彼女自身が研究者だったからでもあるんです。今でも思い出すのは、あの図書室のあのコーナーっていうのはものすごく仕事がしやすい、書きやすい場所でした。今、私は新しい研究室をロイドホールにいただいたんですけど、やはり研究室で研究はできないのです。つまりその人がどこで仕事をするかっていうことはものすごく重要なことで、いい場所を見つけなきゃいけない。さきほどのお話の図書館の共同研究室っていうのはやはり大切ですね。まだ数が足りないって感じはするし、ゼミはあそこでやりたいと思いますね。ゼミをやりながら、途中で調べたいものがあつたらすぐにとってきてもらって、こういう資料はどうかなって、すぐにディスカッションするというのが理想ですね。

その場所性っていうのは、場所のもっている力というのは、まさにいろんなことをアフォードしていて、かつ個別性が強いと思います。みんなが見てる場じゃないと勉強できないって人もいますよね。トロントの図書館は、がらんとした場所でただ本が置いてあるっていう感じですけども、ヨーロッパの図書館に行ってみると、歴史を感じるんですね。そこでこういうのを調べなきゃならないっていうのは、その図書館のムードが決めてくれるのです。インターネットの情報空間は、有用なものを検索する力としては圧倒的で、それを否定する気は一切ないです。ただ物理的なものも持っている「もの」性というのかな、あるいは勉強するためのスペースの力っていうのは独特で、どこに自分の居場所を見つけるかっていうのは、住処を見つけるようなもので、とても重要だと思うんですね。いろんな場所が図書館の中にあつていいだろうと思います。

質問者B：すみません。今の話ね、どこでもいいんだつたら、森の中でも公園の中でもいいわけですよね。

河野先生：そうです。

質問者B：そこへ本を20冊も30冊も持っていくわけにはいかないから、どんどん電子化が進んでくれば、そういうことが可能になるわけですよね。そうすると図書館っていう場所は

ますます要らなくなるっていうことにならないですか。もちろん図書館がいいっていう人もいるとは思いますが…。

河野先生：図書館がいらないというのは建物としての図書館という意味ですか。

質問者B：はい。

河野先生：でもライブラリアンがいて、じっさいそこで集中的に仕事をしているレファレンスコーナーってのが図書館の中心だと思っているので、そこが電子化するものもあるけれども、さきほど言ったみたいに書庫をめぐることによって発見するっていうことも多いのです。書庫のようになんでもランダムに並べてあるっていうのは重要です。

質問者B：それは要するに、物としての本はなくなるまいだろうと。

河野先生：個人的にいうと電子物を読むのと、本を読むのは何倍も違うと思いますね。私、本を読むの結構、速いんですよ。それと同じスピードで電子物を展開するわけにはいかない。目が疲れちゃう。それから買った本は破いたり貼ったりしてしまいますので、コピーするのめんどくさいんで、背表紙切っちゃって分解したほうコピーよりも早い場合もありますね。時間には代えられないので。「先生、何で2冊買うんですか」って言われるのですが、1冊は切って破いて使うんですね。

司会：港先生はしないでしょう。

港先生：できない。

司会：考え方が違うから。

河野先生：はい。そういう感じに道具的に使うし、本に書き込んだりもしますので。書き込むのは、電子物では難しいでしょう。

質問者A：メディアの使い方ってそれこそ個別性の問題だと思うんですね。今日は僕はずっとiPhoneでメモをとってます。今の大学生の世代になると、レポートできえもスマホで書いて、最後までめだけPCでやるっていう子もいっぱいいるし、紙の本で探すよりも、電子の本で探すっていう人が確実に増えてくると思うんですね。となると、これからの図書館、知や記憶の環境を考えるって時には、われわれ世代より上の、これまでの時代を作ってきた人たちの世代のメディアの接し方というのはもちろん重要なんだけど、これから先の未来、メディアとの接し方がどうなっていくのかっていうことをふまえながら、過去と現在と未来の連続線の中でどういうふうに変わっていくのかっていうのを考えないと、今みたいな話には答えられないと思うんですけど。

港先生：まさにそのとおりだと思いますね。次の質問に行くと、最近、図書館が大きくなり、学生が集中して勉強している、しているポーズをとっているのに、何か[刺激を受ける]。ということなんですけど、これポーズをとれるところが大事なんだと思うんですね。周りが勉強しているように見える。自分もしょうかな、していないとなんかかっこ悪いとか。これ最初に言った、自分が好きだから行くっていうところにつながると思うんです。ポーズをとるぐらいだったらうちでやればいいじゃないかっていうと、そうでもないんですよ。そこが人間の面白いところだと思う。勉強したいわけではなくても、図書館に行く。ポーズをとれる場所だからでしょう。ポーズの意味を写真家は撮影をとおして知っています。外と内の

関係ですね。ポーズは外に対して見せる、外へ向かう「見せかけ」と思いがちですがけれども、それで内側も変わるんですよ。悲しい気もちをするから悲しい顔になるんじゃないくて、悲しい顔、悲しそうなポーズをとるから悲しい気もちが生まれるんですね。それは感情の話だけではなくて、知識においても同じなんだと思う。難しい勉強をしているようなふりをしていると、難しい勉強に興味が生まれる。人間ってそういう風にできてるんですよ。心が体を作るだけじゃなくて、体の方が心をアフォードする。アフォーダンスの偉大なところは、それを理論化できたところにあるのではないかと。ギブソンの意外な影響力かもしれません。

そういう意味でいうと、図書館の役割は、そのポーズをそれぞれの時代でどう生み出していくかにもある。タイの伝統建築の木造建築の中に図書館があるわけですよ。そうするとどうしても、そのような雰囲気を生み出すデザインや思想に興味がわいてくる。おそらく知の技術の歴史は線的には発展しないんでしょう。たとえばこれから数年後に、「もっともラディカルなこと」は、誰もが電子辞書やネットで検索している時代に、みんなの前で重い辞書を開くことになるかもしれない。一種のスキャンダル。それは文脈を外れるってことですよ。文脈がひとつだけだと生まれにくい。つねにいくつもの文脈があって、その中から人と違ったアイデアや考え方が見えてくる。それが生まれるのがいい図書館なんじゃないんですかね。まあ多摩美の図書館はちょっとアフォードしすぎたところがあって、家具に凝って、低めの椅子もあるんですけど、波打った形の椅子を置いたんですね。大型本を開いて見るのに楽な椅子なんですけど、そこでけっこう昼寝してるんですよ。これはアフォードしすぎたかなと。

河野先生：本を粗末にするかしないか以外の点では、本当に港先生のおっしゃるとおりだと思いますね。私は学会の中ではデジタル推進派ですね。紙媒体の雑誌はもういいから、電子化してみんな手軽に読めればいいじゃないかと言います。あと授業とかだと、外国では、ウェブ上に論文を貼っておいて、読んできてもらってディスカッションをするスタイルがあります。私の授業もディスカッション中心で、私自身はほとんどしゃべりませんから、なるべく時間の無駄なく省力でやろうと思っています。ですから、デジタル化は大賛成なんですけども、今、言ったような研究するためのムードっていうかですね、それは別だと思います。ちょっと話ずれていいですかね。

今、私、哲学カフェをやっているんですけども、どうしたら人が話せるようになるんだろうかっていうのは、もう本当にムードと空間、みんなが円形に座っていてお互いに見えるとかですね。最初にイスから立ち上がるウェーブをやっていますね、体をつかった遊びをやって、場をリラックスさせて、アイスブレイキングしてから対話をはじめます。あとどういう場所でやるかも重要なんですね。たとえばかっこいいカフェなんかでやると、それだけでいい議論になるものです。そういう空間の影響かというのとは絶大です。デジタル化した時に私が危惧するのは、できる学生はそれでやっていくでしょう。でもそうじゃない人っていうのは読書や研究からどんどん取り残されていっちゃって、書物にも全然、接しないままになってしまうのではないのでしょうか。デジタルが使えるというのは、結構、能動性を要求すると思うんですね。場に入ればモチベーションされるっていうことがデジタルの中でもあるのかもしれないけれども、今のところあまり強くないと思います。その場に入るとモチベーションが出る、これが図書館という場がもっている力です。身体性と言ってもいいかもしれない。

ですから、私としては図書館は外から見てもかっこいいほうがいいですね。外から見ていて、学生が賢そうに見える。そこにコーヒーなんか置いてあると洒落てるように見える。「うん、この人たちみたいになりたい」みたいなことが、結構重要だと思いますよ。ばかば

かしいと思うかもしれないけど、結局、パリの図書館に行こうと思うのはやっぱりあの中に入りたからだよ。その点でトロントの図書館は建物それ自体は近代的でカッコいいビルですが、中はつまらない作りになっていますね。やっぱりいい図書館に入るとそれだけで勉強したい気分になるんですよね。都では昼寝していても勉強したことになって言いますが、それはムードがそうさせるのでしょう。特に共同学習室みたいなどころは大切です。隣で何か議論をやっていて、そこで足を組んだり投げ出したり、なんか食べてても目つきだけ鋭いとなんかカッコいいなと思います。その一員になりたいみたいな気分になります。強いモチベーションを最初からもっていて、自宅の小さい部屋で勉強できる人はほっておいてもできます。どんな場所でもやると思うので。しかし最初から学習支援という観点から図書館を考えるならば、身体性とかムードっていうのは本当に重要です。少なくとも哲学カフェをやったときにファシリテーターがすることはムード作りが9割で、それができればあとは自ずから議論が活性化します。そういうムード作りっていうのを図書館がやってもいいんじゃないかなと思います。

港先生：デジタル技術に関しては、もうひとつ別のことに興味があって、図書館に出版部があるといい。大学の出版部っていうのは別にあると思いますけれども、もう少し小さな出版部を図書館の中に作る。今は造本までやってくれる大型のプリンタってのがありますよね。それが一台あると、学生が出版までできるわけです。簡単な冊子から、同人誌、ゼミのまとめ、50部100部とかですよ、ゼミの論集って。それくらいのスケールのもので作れる体制が、図書館、学生、デザイナーでできると面白い。電気書籍の話で一番いいと思うのは、そういうマイクロ出版部ですね。本をダウンロードして読むことの次に来るのは、本を作って発信することだろうと。ここ一年ぐらいでできたプリンタの性能っていうのは、ほとんど普通の印刷をこえてますね。再現性の面でいえば、普通の本の出版では絶対出せない色が出るようになってます。ようやく両面に印刷できる紙が出はじめたんです。こうした技術が増えていくと、どんどん面白くなる。百部単位で、オンデマンドではない本を学生たちが作り、それが図書館に入ってゆく。デジタル教科書っていうのがありますが、教科書もそこで作ればいい。発信する図書館、教科書を作る図書館があってもいい。

河野先生：教科書を作るっていうのは、ヨーロッパでも北米でも、論文を編んでテキストを最初に作りますね。そうした編纂そのものは、たぶん図書館がやってくれることで、著作権が付いていたりして印刷物としてはちょっと高いんだけど、他の国ではしばしばやっていると思うんですよ。

ちょっとここから私の方にきた質問に答えていきたいと思います。「二人の先生にですが、外国の図書館と日本の図書館の違いを教えてください。外国といってもいろいろあるけれども、その上で日本に取り入れてほしいシステムがあれば教えてください。」それから、「お二人に聞きます。先生方は学生に対して大学の図書館を使うように勧めてらっしゃいますか。勧めてらっしゃったらどのように勧めていますか。」ということなんですが、いかがでしょうか。

港先生：できるだけたくさん本を借りなさいと言っています。それは借りたい本だけでなく20冊だったら20冊マックスで借りなさいと。探しているものが見つからなかったら隣にある本を持っていけばいいと。図書館やエンサイクロペディアの基本として、いわゆるABC順に並べていくことのもっているラディカルさは超えられていないと思うんですよ。その本なり論文なりの内容がどんなものであれ、著者の名前のABC順で並べられちゃうという、そ

のもっている、一種の暴力性に気づいたのがシュールリアリストだったわけですね。そこからレーモン・クノーミたいな変な人たちがたくさん出てくるわけですけど、そのラディカルさを利用する側は超えていない。棚のシステムが面白いのは、この本が必要だというときにその両隣の10冊は全く関係ない内容の本だったりする。それでももしかすると役に立つかもしれない。そういうことを僕は学生に言っています。それでもうひとつ外国の図書館と日本の図書館、違いはあまりないと思うんですね。システム自体は。もちろんとても素晴らしい司書の方に僕も助けられました。こんなに幅の広い知識をもっている人はいるのかと思いましたね。あなたに研究してほしい、代わりに書いてくださいと思う人もいます。違いといえば、図書館の雰囲気というか、光や匂いを含めた感覚的な違いを感じることはありますね。パリにセント・ジェヌビエーヴ図書館というのがあります。古い図書館で、かのマルセル・デュシャンが昔、ライブラリアンをやっていたところなんですけど、その雰囲気はとてもいいですね。柔らかい外光も入ってきて、小さい緑のランプがたくさんあって、そこはパリに来た学生が行きたい憧れの場所のひとつだと聞いたことがあります。ちょっとロマンチックなイメージもありますね。

河野先生：はい。日本と外国の違いですね。すべての図書館を知っているわけじゃないし、日本の図書館もいいところはあると思うんですけど、私の知っているところとの違いは、やはりレファレンスコーナーが大きくて、担当の人がいっぱいいるってということじゃないかな。これは立教の図書館にはやってほしいですね。それから「大学生に図書館を使うように勧めてらっしゃいますか」ですけども、まあ本を読んで勉強させているかっていうふうに解釈するならば、何を動機として学生は勉強しようとか、調べ物しようとか、本を読もうとするかってことなんです。やはり、人じゃないかと思うんですね。私はゼミを院、4年、3年と連続させて、かつ他の大学の人たちも混ぜてやっていますね。勉強するって面白いっていう雰囲気を作るんですね。そうするとおのずと院生が学部学生にこれ読んだ方がいいよって言うようになるし、図書館の利用の仕方を教えてくれますので、そうするとほっといても自分たちで勉強会とかやっていてくれるんですね。そうすると、図書館を使っているいろいろ調べ物していてくれます。単純に言えば、学習意欲が上がれば本を使うようになるだろうと思うのです。居やすい場所として、使いやすい場所として図書館があるならばそこに行くだろうという非常に単純なことが大切だと思います。モチベーションがどうあがるのかが問題です。人がやっているってことを間近でみていて、「ああ面白そうだな」って思うと、モチベーションが上がります。ちょっと図書館の話から離れて恐縮なんですけれども、私は授業ではそういうことに一番気をつけています。私がやりなさいって言ったって、学生とは親子ほど離れているので、親から言われているようなもので、やらないですね。友だちか、先輩の言葉が一番モチベーションを上げてくれますね。院生や4年生からの影響が一番大切なんです。実践的な観点からいうとそういうことですね。

質問者C：さきほどの館の部分に限らず、ちょっと前にコンサートが無用になると予言した人がいて、録音だけになると言ったんですが、結局、生き延びていて。私は限られた例ばかりなんですけど、[秋葉原の]メイド[カフェ]とか行く人に限ってAKBに殺到したりするんですから、インターネットにはまるような人が同時に、同じ身体的な行動をとって同じカタルシスを味わいたいということに盲目的に動員されているなということだと思うんですね。なので図書館に限った話ではないなとは思いますが。それで質問というのは具体的なことで、伊東豊雄先生のお話で、先生は文化施設をたくさん作っておられるし、逆にそれぞれの現実の事情をわかりすぎるほどよくわかってくださる。伊東先生が仰るにはいろいろ文化的な目的

が明らかな施設は縛りが多くて、建築家は意匠というか個性を発揮できるところが少なく、それで劇場もそれに準じているので。座・高円寺はエントランスがひどく凝ったというか、カフェは談義ができるようなカフェになっていて。それで具体的に図書館の場合は、多摩美の図書館はまだ伺ったことがなくて存じあげないんですけども、さきほど本があまり上までこないようにしたいという主張があった。それで建築家の間でせめぎあいが出る部分があったと思うんですけども、そういう具体的にどのようなせめぎあいがあったのかという点、伊東先生としてはこうしたかったんですけども、ユーザーとしてはこうだっていうようなことについてせめぎあいはあったんでしょうか。それともすごくよくわかってくれたのかということなんですか。作品としてはすごく評価が高かったようですが、自分としては今ひとつだったというようなことがあったと記憶しているんですが、何かそういうことで思いあたることがあったら教えていただけますか。

港先生：建築事務所側からのラディカルな提案に、施主である大学側がどれだけこたえられるのかという問題が大きかったと思いますね。まず敷地がスロープなんです。鉛筆が転がるくらいの。それを普通は整地しますよね。私立大学とはいえ、一応、公共の施設なので。それをそのまま使いたいと、これだけで大変なことなんですよね。1階はスロープになってますからぜひいらしてください。家具、普通のテーブルは4つの足を全部調節できないと置けません。傘立てもそうだし、椅子もそう。雑誌をブラウズするところは、つまり坂道を上ったり下りたりしながら雑誌を見るというふうになり、続ければけっこう疲れるかもしれない。でも4年たつと意外に人間ってなれるんですよ。また全面ガラスなので、プロジェクターを使うときに暗くできないので最初は困ったんですけど、最近はプロジェクターのほうがよくなくて、昼間でも鮮明に見えるというように技術の方が追いついてきている、3年間かけて。ただやはり最初に言ったように、スペースは足りないでしょうね。いずれいっぱいになる。電子化されたものに頼れるかっていうと、やっぱり物としての本、本の形をしていないとデザインやアートの歴史には伝えられないことがあまりにも多い。無限に本のために、無限の空間が要るということで、ここでまたボルヘスに戻っちゃいますね。ぜひいらしてください。

司会：ちょっとお聞きしたいんですけど、港先生はユーザーだけではないと思っていて、図書館とか活字、印刷に関して表象ということですずっと考えてこられたお立場ですよ。そして写真家としても今、見せていただいたように、いらしたところを撮ってこられて。現実に図書館を動かしていく職員の人のような立場であるとか、純粋なユーザーとか、それから建築家も、というように関与した人がいると思うんですけど、私が一番興味があるのは、港先生が表象として捉えていた図書館とか本とかっていったようなものを、現実に新しい図書館を作るときにどういうふうに創造につなげていったのかということに興味があって。先生のご本を拝読していても、いろんなものを見ておられるし、知っておられるわけですよ。それが港先生にしかかけない形で新しい創造になってくるっていうのは、私はいろんな方の作品からしょっちゅうインスパイアされていて、[しかし創造につなげることに困難を感じているので]港先生のそういうところに関心があるわけなんですけれども。具体例のひとつとして、たとえば多摩美大の、その表象のものとして捉えていた図書館の世界を現実の建築であるとか、設計であるとかいったようなこととか、約束事とか、いろんなことを決めていったりするときに、どうやって現実と表象の世界を折り合いをつけていくのか。それはまた表象に戻っていくわけでしょう。先生の場合だったら。

港先生：現実の図書館の大きなお仕事として、「守る」ということがありますよね。保管して守る、そして整理する。このことと僕らがやっている広い意味での「創造」というのは、どこかでかならず背反するわけですよ。創造と破壊はセットですから、図書館にとって、一番いいのは使わないことだと思うんですよね。極論を言えば。でも使ってもらうためにいろいろとやるわけです。僕は本を破ることはしませんが、できるだけ自由に使いたい。その自由に使うベクトルと、もともと図書館の機能も持っている保守ベクトルっていうのは、反対になるわけで、そこは日々の話し合いのなかで解決することになります。結論としては、役割や抱えている問題は違っても、どれだけ図書館が好きかっていうそれに尽きるなどと思います。そこで折り合いがつく好きっていうのは人間の心も持っている一番大きな何かのひとつで、それが感情も知も感覚もすべてをどこかで制御しているのではないか。好きということがないと現実のポリティクスも全然うまくいかない。そういうことは河野先生が何度も書かれていると思いますし、そうなんです。

表象、イメージからすると、いろんなことを考えたり、書いたりしました。そのほとんどは実現不可能というか夢物語なんですけれども。たとえば本はイメージであるというふうに思った。なので、蔵書は全部、見せてほしいと。すべて百パーセント、イメージとして見せてほしいと。でもそんなことできない。ライブラリアンのワークスペースなんか無くなっちゃいますからね。でもできるかぎり。それは美しい本だけじゃないんですよ。新書と文庫をすべて同じ棚に背表紙を並べるというコーナーがあります。天井に届く大きなアーチ形の書棚がありまして、そこに文庫と新書が全部並んでる。それを見ることによって、「新書」とは何か分かる。美大でも出版系にいく人がたくさんいますが、文庫と新書の違いが専門的な知識を得る前に感覚的にわかる。全部見せるということ。つまり表象というのはクオリティだけでなくクオンティティが大事で、量を見せる、量を感じるというのがすごく大事なんですね。特にコンピュータが一般化してからというもの、1テラとか2テラのハードディスクを使うわけじゃないですか。テラって何でしょう。その圧倒的な力を量として見せたり感じさせることが、それが「インフォメーション」のデザインのひとつだと思うんです。クオリティはもちろん大事ですよ。ただ僕らが置かれた今の時代ってクオリティよりもクオンティティの、実にブルータルな力が本当にいろんな問題を引き起こしている。それを身体でどこまで感じられるかね。そうしたクオンティティを表象化してそれを伝えるのはなかなか難しいです。しかし図書館っていうのは実は歴史を通じて、それを延々とやってきた場所でしょう。少なくともアレクサンドリア以来の図書館は何をやってきたかという、まず量を扱ってきた。もちろんそれぞれの知識的な分類はありますよ。だけど圧倒的な量、しかも時間を超えた量をみせるのが図書館のすごく大きな機能だったと僕は思う。それは書庫もそうだし、司馬遼太郎さんの記念館も、見え方としてはそうじゃないですか。

河野先生：今のすごくよくわかるなっていう部分もあって、学生に論文を書かせるときによくあるのは、手元にある本を一冊精読してから次に行くっていうことなんですよね。こうしたことをやるなど私は言います。さしあたり検索エンジンかけて、関連しそうなものは全部10分で読めと指示をします。1冊10分、あるいは5分でいい。そのかわり100冊読んだほうがよいのです。それで今のブルータルなパワーなんですけれども、関係しそうなタイトルが付いていたけど自分のテーマには全然関係ないのが50冊で、30冊ぐらいは資料として使えそう。最後の20冊ぐらいが全部読んでもいいかな。これが卒論のときに役に立ちそう。レファレンスには、読まない50冊は載せなくていいけれども、資料として使うときは載せておく。そのような形の指導をするんです。そうした速読の中ではじめて

自分の関心の位置づけってというのがわかるんですね。自分が書いているのがマップ上のどの辺にあるのかってというのがみえてくるのです。さきほどあったように新書を全部見ると、新書ってというのが何かはじめてわかるっていうような形で、同じ本も10分見るとその本ってというのが大体何を論じているのかってというのがわかる。論文で検索すると同じようなタイトルがバァーッと出てきてしまうので、本を検索するのがよいでしょう。学部学生レベルならば。そんな感じで指導してますね。そのためにはどんどん読んで次、次、というかたちで目を通す段階が必要です。私もそうしています。私は、400字書くのに、資料は本1冊読むつもりで執筆しますので、300枚の原稿を書くとすると300冊に目をとおす形にしています。そうすると書いたものの濃度が上がります。濃度が薄くなるとつまらない本になってしまいます。そのときに1冊10分だけかけてサーヴェイ読書をします。どういうふうに読むかという、目次と翻訳だったら後ろの解説だけ読んでしまう。序文と最後の2、3ページを読む。それで結論を読んで、概要をつかむみたいな感じです。それで参考文献に重要度ランキングをつけるんですね。それはインターネット無しにはできない。しかもそれを量的に処理していくっていうのはものすごく大切に、こうしたサーヴェイを一度しておかないと、書くものが恣意的になってしまいます。それを卒論を準備している学生にやらせてみると、「自分がやりたいテーマがだいたいどの辺にあるのかわかりました」と言ってくるんで、それでは最重要として選んだ20冊はきちんと精読しなさいと言います。それをノートとるなりして精読すればいいのです。もしこれが卒論じゃなくて短い論文だったら、分量を落とす形でそういうふうな形にさせます。それでも、そうしたサーヴェイ読書は図書館っていうスペースじゃないと難しいと思いますね。1時間5冊読めれば、6時間で30冊読めるだろう。3日やれば100冊なんだから、たった3日できわめて大まかだけど全体像がつかめる。だからやってみなさいっていう感じです。

港先生：アスリート養成みたいな感じですね。

河野先生：そうですね。

質問者D：私は大学図書館に勤めております。お話を聞いておまして、タイトルが「逸脱する」ということで、立場的にはあまり「逸脱」できない難しい立場にいるかなと思うんですけども。さきほど港先生のお話をうかがった時に、本も建築であるというお話がとても印象深かったです。多摩美には行ったことがないのですが、武蔵美の大学図書館に行く機会がありまして、美大の図書館では図書館自体への視線が少し違うと思いました。図書館自体が教材であるとか、作品であるとかってところが随分違うところですね、なかなか真似できないと思いました。武蔵美の方にお聞きしましたら、館内に木をたくさん植える計画があったらしいんですよ。私たちの立場からしますと、かなり「逸脱」していますが、図書館の目的性があるかということだと思っんですね。美学やアートを追及する所だったらそうした内部が森林のような図書館もあると思いますし、機能性よりもそういうアイデアを追及してもいいのかなと思いました。あと河野先生のお話の中ではレファレンスという言葉をよく取り上げていただきまして、そこから「逸脱」ということを考えますとですね、今では図書館員が教えるというよりも、学生同士が教えあうというサービスが出てきています。従来ですと、学生だけに任すとお互いのハラスメントが起きるんじゃないかとか、そこから個人情報漏れるんじゃないかとかいうことで、学生のスタッフってというのはなかったんですけども、最近では学生に手伝ってもらってもいいかなと考え方が変化してきています。また、日本ではめったにありませんけど、図書館員の顔とメールアドレスが利用案内やホームページに出てるんですね。日本では個人情報厳しいのでなかなかそういうことはできませんね。

そういう意味では、私は古くから図書館にいるので、「逸脱」と思えることも出てきています。ツイッターとかいうの、私には「逸脱」に思える部分もありますけれども、そういうコミュニケーションに親しい人たちにとってはそれもアフォーダンスになるのでしょうか。私たちの代の人には違うアフォーダンスがあったのかもしれないし、やっぱり時代によって慣れ親しんだ雰囲気が変わってきているのかなと思います。

港先生：美大の図書館っていうことで言うと、たとえば多摩美や武蔵美では蔵書の中に図版があるものが圧倒的に多いんですね。その図版を利用しやすくするっていうことは大事になります。もうひとつは、大型の本が多くなりますから、棚の高さが必要になります。なのであまり高いと持てないわけですよ。その重さや高さによってデザインが変わってくる。そこでふつうの直線の書棚ばかりだと人が通りにくくなっちゃう。大型の本を持った体の動きも考えてあいうふうな曲線になっていると思うんですね。というふうに本がもっている、特に画集やカタログといった大型の書物の形や重さが建築を決めていったということは言えると思いますね。

国会図書館での勉強会に参加した折のことですが、あのエントランスに大きなスクリーンができないかなと思いました。たとえばその日に利用されている本のすべての表紙が全部映し出されるようなスクリーンですね。仮に一万冊ぐらいだとすると、その表紙だけでもいいですよ、それがいっきに表示されている。すると図書館に入った瞬間に、それが目に入ってくるだけで、よし頑張ろうとなるかもしれない。雑誌をブラウズするのと同じように、なるほど今、こんな本が読まれてるんだとか。そういった利用を、もちろん個人情報の問題もありますけど、そういう利用状況を可視化するっていうのも、図書館の大きな知の表象化で、面白いんじゃないかな。たとえばこんな変な資料があるんだとかね。それは誰かが利用しない限り、ポルヘスと同じで2度とされないかもしれない。でもそれが可視化されることによって、今こういう本があるんだっていうのがわかるようになります。データベースの構築だけだと、そういうセレンディピティはなかなか生まれえないと思うんですけど、図書館の建築そのものに、一気にプロジェクション・マッピングすると、それによって何か起きるかもしれない。それは図書館でなければできないことです。そういう数を扱えるのはやっぱり図書館であり、そしてコンピュータなんですね。一千万冊を全部マッピングしちゃうとか。関連って河野先生がおっしゃったけど、新しい関連ができるんじゃないか。

質問者E：大変面白い話をありがとうございました。実は1980年代の後半から電子化が進むにつれ、ひとつは図書館はいらなくなるという話が出てたんですね。それに関して、われわれはそうではないんだと言っていた。その理由を港さんに明確に述べていただいたと思います。そして2000年以降に大学図書館で言いますと、インフォメーション・コモンズみたいな形の実現した。デジタル情報が進展するなかで、アフォーダンスの話もあったように、図書館はディスカッションして勉強する場という位置づけなんですね。

しかし、大学図書館には一般にさきほどおっしゃっていた量の問題があるんですね。物理的に資料をどのように収容するかということと、もうひとつは特に私立大学の学生数がすごく多いわけですね。そういうところで図書館をつくってみても、収容できない可能性があるんですね。これをいったいどうするんだと。できても雑踏のような図書館だと。それはそれでもかまわないのかもしれませんが、学習という観点から見れば、むしろ大学全体が図書館であってもいいわけです。しかし図書館という身体的なものがある。それを大学全体にしたら図書館は消えてしまうのでしょうか。あるいは図書館の中に教室を、もちこんだところもありますが、そういうのはどういうふうに考えたらいいのでしょうか。

港先生：そういう議論は私たちのときにもありました。敷地面積はそれほど大きくないので、学生数4,000でもそれで入りきることかどうかという。それからそれぞれの学科にある図書館の蔵書はどうするのかという問題で、それはまだ解決したわけではないんですけども。ひとつは小さな図書室を分散化させるというのは、まだまだ考えていいことだと思いますね。それぞれの学科や研究室に図書室を作って、利用頻度の高い専門性のあるものについては図書室に学生に行ってもらおうと。それである程度の整理はできるだろうと。でも本は一元管理すると。それは一部やっていますね、うちの大学では。もちろん限界はあるわけですけども。

オックスフォード大学にボドリアン・ライブラリーがありますけれども、カレッジごとにもライブラリーがありますね。それを全部統合するっていう話があったんですよ。僕がちょうど研究で滞在していた2002年か03年だったんですけども、それこそ大学をひっくり返さんばかりの大事業ですよ、それは。今どうなったのかちょっとわからないですが、当時は大反対の声をよく聞きました。それはもちろんカレッジの伝統に反するというのもあるんでしょうけれども、それ以前に独立しているからいいんだっていう考え方ですよ。もっと言うと、これはイギリス的な考え方ですけど、限界があるからいいんだと。全員入る必要なんかまったくない。そんな朝早く起きて行けばいいじゃないかと。これは僕が行っていた大学はいいんですけど、隣の大学は予算がない、暖房すらない。冬になるとみんな風邪ひいてる。でもそこはパピルスとかあるところでそれでいいんだっていう。あまりこれは現実的ではないんですけども、要は考え方としてどこまでユーザーの期待に応えるかであり、百パーセント答える必要はないということでしょう。これはフィロソフィーとしか言いようがないですよ。限界を定めることによって、創造性を高めるという、考え方としては理解できる。限界があるからこそ、それを越えようと頑張る。たとえばコピーも1回で10枚しか取れない。10枚だったらどれコピーしようって必死になって選びますよね。見開きのコピーも、本を開きすぎて痛むからダメだと。そうするとけっこう考えます。どれをコピーするか。

質問者E：大学はコミュニティっていうのがあって、図書館がくっついているのがよいという話ですかね。

港先生：大学に関してはそうだと思いますね。

質問者E：逆に言うと、図書館はコミュニティごとにほしいという。

港先生：そういうことですね。一見時代に逆行しているように見えるかもしれないですけども、ただ大学がもっているひとつの知をオーソライズする機能というのはけっこう大事なわけですよ。誰がオーソライズするのかという、それはやはりそれぞれのアカデミーが責任をもつべきだと思うし、もちろんwiki的な知の構築というのもあると思うんですけども、だからこそそこを手放さずにもっているということが重要だと思うんですけども、どうでしょうか。反動でしょうかね、僕は。

河野先生：ちょっと別の角度から話しますと、僕は自分の研究室をゼミとか授業用に使うのが好きなんです。それはなぜかっていうと壁に本がズラッと置いてあるので、議論に出てきたときにしげたりとか、ゼミが終わった時に「何か読む本はないでしょうか」っていうときに、「じゃあ、これはどうかな」ってしげたりできますね。それは私の私物であったり、個人研究費で買ったものなので、本に線が引いてあったり、付箋がついてたりしている。そうした研究室で授業をするのは、学生に対していい効果があるんじゃないかと思っているんです。それはなぜかという、本棚というのは私の集めた意味空間になっていると思うんで

すよね。それを学生が見つけた時に、たとえば、「ああ教育哲学だったらこういう関連の本を読むんだなあ」みたいなことを発見できると思うんですよね。やっぱり小さくてまとまりのある図書館、たとえば、ルーヴァンの図書室というのは、いい意味でコンパクトにまとまった図書室で非常に関連と意味が見いだしやすい。そこでは研究がやりやすい。トロント図書館のように大変に蔵書数が多い場合には、これほどの大量の情報を、分野を超えて集めてあることは他の場所ではありえないので、自分で検索のつながりがつけられるならば素晴らしい場所だと思います。しかし、さきほども言ったように、本が記憶だとするならば、どうやって思い出すかが問題なんですよね。思い出せないのであればそれは謎のままですが、記憶がたくさんあって思い出すポテンシャルがたくさんあることは重要です。そうした情報の多さは、関連性の厚みを生み出すと思います。思い出すっていうのは関連性で思い出さることなのだ、何度も主張したいと思います。その関連性を誰がつけるのかっていうと、学生本人がつけるんだ、自分でとにかくやってみるんだでもいいと思うんですが、やっぱりそれは他の人がどのように調べているかを見て、その人を通して情報にはこういうつながりがあるんだってみえてくるのが学習のモチベーションをあげると思うんですよね。なので総合図書館というのは逆に関連性というのを強くつけてあげるような補助機能がないと、ただたくさん本があるだけになってしまうでしょう。私はこの新図書館はくつろげるスペースがあって、学生が常にそこに集まっているのでよかったです。もうひとつ望みたいのはそういった意味関連をつけてあげられるような何かの機能があるといいなと思います。だから学生同士でこういう本を読んでみたらっていうアドバイスもあると思いますし、専門研究者用のライブラリアンもいるといいなあというふうには思いますけどね。

港先生：やっぱりレファレンス・コーナーにいる一人の人っていうのはどんなコンピュータよりも勝ると思いますね。究極として、それがないと総合図書館というのは消えるんじゃないでしょうか。

河野先生：事務の方たちからの研究に対するコミットがもっとあっていいと思うんですよね。教育関連の国際学会に出てみると、学会発表する人の中心はもちろん大学の教員なのですが、それは私の参加している国際学会では半分くらいなんです。それでもう半分は誰かっていうと、それは事務の方がうちの大学はこういう教育をしていますとか、図書館の人が図書館を中心とした開発教育って事務の方が発表されているんですね。そういう学会発表のかなりの多くが、教員がファースト・オーサーでも、セカンド・オーサーが事務の人で、発表も担当していたりする。そういう事務の方自身が学術的にクリエイトする分野にコミットしてくださることを期待したいです。図書館ももっとそういうことがあっていいんじゃないかな。ここにこういうご質問があったんですね。「小中高の教員がライブラリアンのようになってほしいという発言があったけれども、それはどういうことなのか」という質問ですね。それは、ライブラリアンが研究にもっと強くコミットすることがだんだん求められているんだと思います。図書館での学習・研究支援についても学生さんにもやってもらうことが必要で、トロント大学の図書館だと院生がレファレンスやコンピュータ補助などでズラッといてですね、いろんな補助機能をしているんですよね。そういった形で小中高の教育というのも、結局は、ある子どもに合わせて子どもの関心をファシリテートするような形で補助してあげるということが最も大切なのです。そういった研究補助をするかたちで、子どもと一緒に何かの探究をやっていくんだということです。教員は子どもの共同研究者なんだという意識を小中高の先生方はもってほしいなと思います。ただ教えるんじゃなくて、共同研究者なんだということです。ですから、事務職員の方が、教育や研究や表現へのコミット度をもっと高

めていただいてもいいんじゃないかなと思います。「じゃ、どういった内容を図書館はアウトプットしていくのか」とお尋ねでしょう。私は専門じゃないので具体的なことは言えませんけれども、大学が全体として研究を志向していくならば、さらに大学のレベルは向上していくと思います。あるいは図書館全体で発信や表現を志向していけば、学生は図書館に入っただけでモチベーションされていくでしょう。勉強をやる気のない大学に一人研究活動に熱い教員がいても、空回りしてしまいます。逆に、全体として研究を推進する雰囲気があって、大学の職員の方から研究を進めるような対応を学生にしてくれると、学生のモチベーションは変わると思いますね。そういうことが、私がムードとか、身体性とかといった言葉で意味していることです。

港先生：ひとつ大切な質問があるので、それに答えます。一番最初にロンドンの空襲の時に屋根が吹き飛んで、がれきになった図書館に来て本を手にした人の写真が心に残ったと。それで彼らは本に何を求めてあのような状況下で本を取りに来たのだろうかと考えましたが、どうでしょうか、というご質問です。僕はたぶん、空襲のある前の週にあの本を借りようと思って、普通に来たんだと思います。空襲にあつて屋根は吹き飛んだけど、本はたまたま残ってたから手に取ったんだと思いますね。そしてまさにそのことが、図書館がもってる大切な役割だと思うんです。変わらずそこにあつて本を取れるということ。ロンドン空襲の場合は、生きるよすがですよ。彼らは本に何を求めたのかっていうことですが、特に何も求めてはないかもしれない。ただ本を取りたかったんだと思います。本を借りること、そして本を持って帰れることが、市民にとっての生きるよすがだったんだと思うんです。それは空襲下のロンドンだけではないと思います。

司会：はい。それでは時間がきましたので、まとめようかと思ったんですが、まとめないほうがいいかと思いましたので、これで終わりにしたいと思います。今日は先生方、どうもありがとうございました。